本日の集会に結集された全ての学友諸君●

「六〇年安保斗争」において、既成左翼の混迷と反動、更には妨害をはねのけ、斗いを明確に領導することによって、日本階級斗争を最先頭で斗い抜く戦斗的な部隊として登場した革命的左翼が、「六〇年安保斗争」の敗北とその後の混迷を乗り越え、六〇年代後半において圧倒的に斗い抜いた「六七年一〇・八」前後の政治諸斗争と「全共斗運動」その中でも「プロレタリア国際主義と組織された暴力」のスローガンの下、その後の政治斗争の内実を切り拓く端緒となった「六七・一〇・八佐藤訪ベト阻止羽田斗争」から一〇年という歳月が経過した。

これし、権力と非和解的に斗い抜いた六〇年代後半の斗い、とりわけ全共斗ゅも、権力の徹底的な弾圧と主体的な脆弱さの故に、本質的な諸課題を様々に提出しつつも、敗北と解体を余儀なくされ、七〇年代に入るや、日本の全左翼戦線が「混迷」情況に突入していったのである。そして、最早現在においては、〈左翼戦線〉という言葉さえが意味を喪失するまでに情況は進んだのである。

我々は本集会において、「一〇・八」前後の政治斗争が、そして「全共斗ゅ」が突きつけた課題を、我々の主体的立場から再度捉え返すとともに、我々の斗いの根拠を徹底的に対象化しつつ、「何を敵として、如何なる斗いを組織していくのか」を明らかにしていかねばならない。

☆

「六七・一〇・八佐藤訪ベト―一一・一二訪米実力阻止」斗争と打ち続く「六七年羽田斗争」は、日本階級斗争史上、一大転換点となった画期的なものであり、まさに、この斗いこそ六〇年代後半において日本の革命的左翼が、「羽田」―「佐世保」―「王子」―「成田」へ、そして「日大―東大斗争」、更には全国の学園によぶ「全共斗ゅ」へと巨大な進撃を打ち抜く契機となったのである。そして「新宿」―「銀座」―「神田」をはじめとして展開される街頭実力斗争や、更には、バリケード戦、学園・工場占拠斗争、マッセンストライキを軸に、「沖縄―安保斗争」―「全国全共斗ゅ」と、まさに、日本の革命的左翼は、現代帝国主義内部において、階級斗争を未曾有の規模で斗い抜くことによって、国家独占資本主義に対する先進国階級斗争の新たな質をかいま見せたのであった。しかも、そういった斗いの中で登場した徹底的な大衆叛乱は、膨大化し、表面的には安定化していくように見える現代国独資の内部に存在する被支配者に対して、日常化している疎外・抑圧・解体状況、更には、構造的貧困と矛盾を被支配者大衆に転化し累積させていくことで延命を図ってきたことに対する、大衆の側からの権力に対する反撃戦であった。しかも、「ベトナム反戦斗争」を契機に、日本プロレタリアートを始めとする全世界の被支配者大衆は、既成左翼指導部（社民・スターリニスト）の反動を蹴とばし、「大衆叛乱」といった形ではあれ、自国国家権力と斗い抜くことで、「米帝」と「南ベトナム国家権力」に対

して非和解的な、徹底した弾圧を押し進めこいるベトナム人民との連帯を宣言し、新たなプロレタリア国際主義の質を前提的にではあれ示したのであった。

この様に、六〇年代後半の革命的左翼の闘いの質を規定した「一〇・八羽田闘争」はそれまでの反戦運動の動向に対して闘いを打ち抜いたのであった。

米帝の侵略と政治的には「左翼」ファシズム国家」化する「資本制的自由民主主義国家」つまりブルジョア独裁への転化によって、また、日「共」スターリニストの反動による戦後的Q闘争の敗北によって、戦後危機を乗りきった日帝は、経済過程の有機的構成を高度化させつつ、いわゆる「朝鮮特需」をメルクマールとして、高度経済成長を遂げ、国独資体制を完成させていった。そして、日帝は、世界帝国主義の盟主「米帝」に対して「対外政策における相対的対等化」をつきつけた「六〇年安保改定」こそ日帝が独自に帝国主義として展開を開始する指標であった。更にその後も日帝は、社会的有機的構成を高度化させていくのだが、その構造的矛盾も同時に累積させていったのであった。その構造的矛盾を外在的に転化させんものとして、日帝は、東南アジア侵略―収奪体系の強化にのりだすとともに、それを保障するために米帝と結託しつつも、独自の極東反革命軍事体制の強化を押し進めていったのである。その端緒こそ「六五年日韓条約」であった。これも日帝は、更に六七年、「沖縄の返還要求」を米帝につきつけるのである。つまり、米帝は、

日帝の諸国の政治支配の拡大要求を認めざるを得なくなるとともに、東南アジア侵略反革命前線基地化と独占体制の拡大再編を目的として「沖縄返還」を要求し、遂に米帝は「後退をせまるのであった。

六〇年代后半、まさにIMF―GATT体制が動揺する中で、帝国主義間の国際競争戦が激化すればするほど、日帝の再生産過程にとって東南アジアは死活にかかわる市場となっていった。これに、ベトナム人民の民族解放―社会主義革命戦争を頂点とした東南アジア人民の闘いは日帝の生命線をおびやかすものであった。これに対し、東南アジア人民の闘いを米日反革命体制の強化によって弾圧し、東南アジア侵略の更なる推進に向けての日米両帝国主義の調整、更には「七〇年安保改定」による極東反革命体制の強化、七〇年以降の両帝国主義の路線決定、―こういった日帝のアジア侵略―反革命体制強化の動きの端緒が「六七年一〇―一一月訪ベト訪米」による日米会談であった。

これに対して革命的左翼は、「日米会談粉砕闘争」をもって「七〇年安保粉砕」に向けた闘いを開始するとともに、「ベトナム人民」との連帯を全世界の被支配者大衆の「ベトナム反戦闘争」との結合を克ち取る中、「六七年一〇・八―一一・一二羽田闘争」を闘い抜くのである。まさに、「六七年羽田闘争」は七〇年安保闘争を日米両帝国主義打倒の闘いを両軸に、それを后進国的Q闘争＝民族解放―社会主義革命を目指す武装闘争と結合させた国際的Q闘争の原点となるのである。「プロレタ

リア国際主義」の内実を復権し、その後の斗いの方向性を創出させたのである。

これも、全世界の「ベトナム反戦」を斗う被支配者大衆は、戦後世界秩序体制の中で、米帝―日帝―南ベトナムカイライ政権と非和解的に斗うベトナム人民に対する連帯を、単に反戦斗争としてだけではなく、国家権力に対する斗いを目指すことによって、まさに真の国際主義の内実を、論理的・思想的、更には感性的イメージの問題としてさえ追求していった。

我々は、革命的左翼だった70年代后半の斗いの中でれいま見せた「プロレタリア国際主義」の内実を更に発展させるべき課題を負っている。と同時に「組織された暴力」の問題をもである。まさに、日本の革命的左翼は国際スターリニストの公認理論である「平和共存のもとでの議会を通じての社会主義への移行と社会主義ブロック圏の拡大」に対して、「プロレタリアート」の階級への形成と、プロレタリア階級の革命的暴力によるブルジョア独裁の打倒、プロレタリア階級による政治権力の獲得」、そして「プロレタリアートによる全世界の革命的変革」以外にプロレタリアートの解放があり得ないことを示した。我々は「組織された暴力」を再度「プロレタリアートの階級形成」の問題として本質的に追求すると同時に、何故、70年代后半において大衆叛乱が勃発したのか、それを日帝の権力支配状況と被支配者大衆の存在様式から明らかにしなければならないだろう。「プロレタリア国際主義」「組織された暴力」「ソヴィエト」「コミューン型組織」の追求こそは、70年代后半の斗いの中で追求された最も重要な課題であった。「プロレタリア国際主義」の名において、戦後世界秩序と激突しつつ斗い抜いているベトナム人民との連帯を、革命的左翼は、社「共」をはじめとする既成の社民・スターリニスト指導部を粉砕する中、国家権力との非和解的な斗いの中で追求していった。そして既成指導部が「議会主義」の土俵へ、つまり「支配秩序」内部の泥沼に斗いを固定化せんとした時、「組織された暴力」の質でもって「支配秩序」そのものに対する斗いをたたき抜き、既成支配秩序体制の外側において自らの政治性を貫徹していったのである。これも「コミューン型組織・ソヴィエト」として新たな組織性と大衆権力の樹立を追求していったのである。

これら、「一〇・八」以降、「プロレタリア国際主義」と「組織された暴力」を二大柱に斗い抜かれつつも、国家権力の弾圧の前に敗北を余儀なくされていったのである。国家権力は、直接的には特殊部隊を前面に押し出して弾圧をかけてくるとともに、革命的左翼と大衆との分断―前段階的解体を企て、破防法を頂点とするファッショ的攻撃をかけてきた。これも、ブルジョワ＝マスコミが、それに手をかしていったのである。だが、我々が問題にしなければならないのは、こういった権力との直接的な政治力学的戦術―戦略論だけではなく、こういった権力の攻撃の前に解体と敗北を余儀なくされた斗いの主体的な要

因とは何れ、である。

ただ我々は、「〈党〉だなれっ」「われらだ」とは決して総括しないだろうし、「全學斗」一派のように、「反帝統一戦線」からソヴィエト・プロ独を夢想した」などとも総括しない。現在、確実に言えることは、「一〇・八」を端緒として、「プロレタリア国際主義」「組織された暴力」「コミューン型組織・ソヴィエト」の三つを主要基軸に展開された〇年代後半の斗いを、我々は現在の权力状況とそれに規定された被支配者大衆の解放への課題を根拠にした斗いの基底に現在的状況的に復权されねばならないということである。

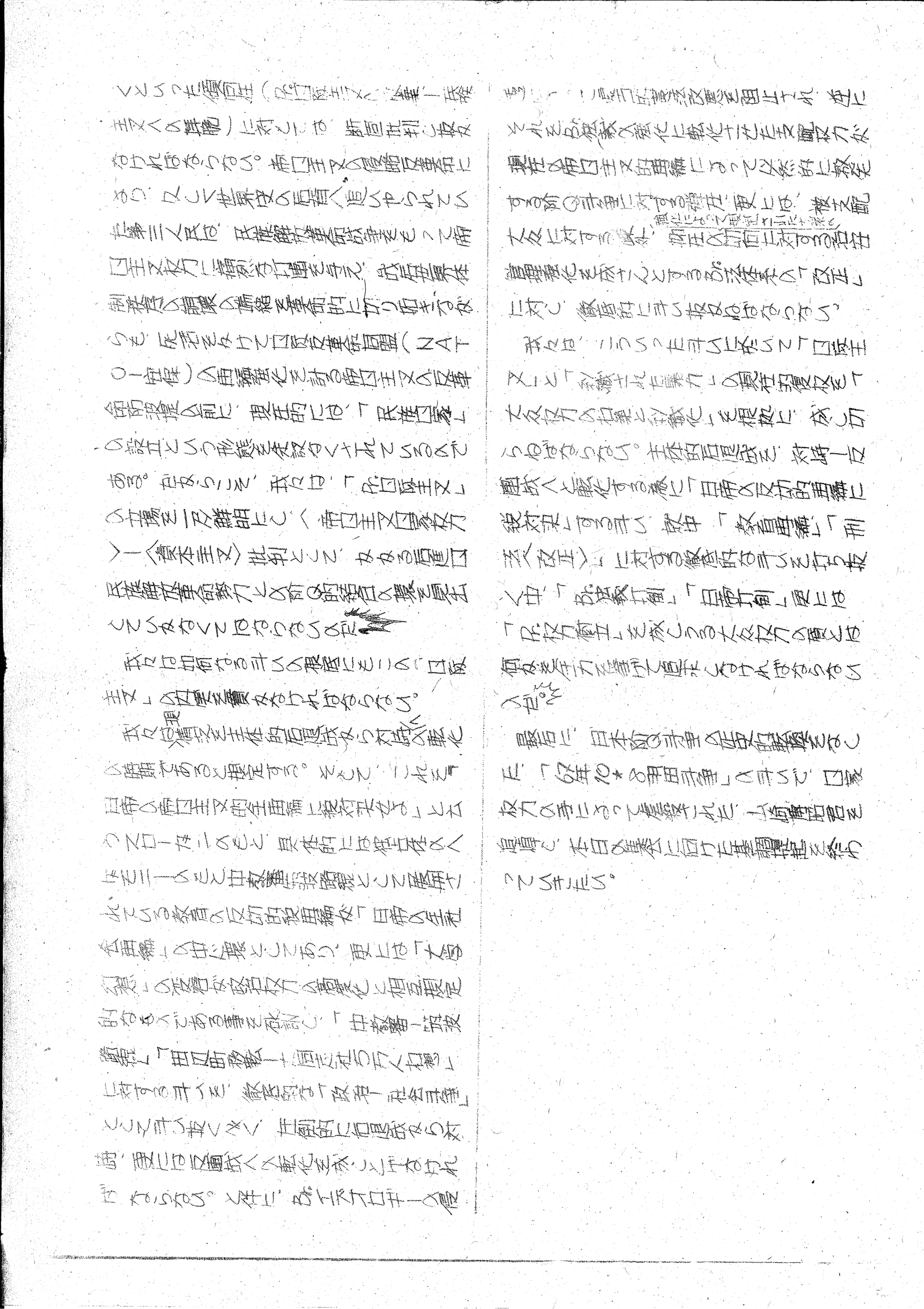
次ページへ続く

(III)

70年安保以後の半世紀における支配的な政治過程でのドラスチックな転換と再編は、成長的に進行してきた戦後世界秩序体制が一挙的に解体した事を意味するのである。その后の展開は戦后世界がかつて経験したなかった、そして想像すらしなかった深刻な大転換危機に陥っている。80年代半ばまでは、この戦后体制の崩壊と正反対の転換とその教訓に直面してキビしい方向性を見失なっていくのである。

IMF-GATT体制の崩壊以降、オイルショック、ニクソンショック（ドルとインフレの同時進行）という最早救いようのない資本主義の根本的危機に陥ってあり、これも、帝国主義的な国際秩序と世界秩序の推移と云う大転換を含めて危機を深化させている。これも全領域にわたっての大転換の累積は、全て被支配大衆に転化され、被支配者大衆は疲弊し拡大する市民社会の中で、ますます疎外、孤立、解体を強要されて行くのを見たっている。つまり危機は客観的な革命情況にもかかわらず、主体的には徹底的な弱さとして存在しているのである。

これに対しては、「10・8」10周年の本集会に於いて、再度「ロシアのプロ革主義」の内実を明確にする事によって変革情況の中の指標をわずかでも明らかにしていかなければならない。我々の主体的立場からいえば、「プロ革主義」とは、国家権力の中で支配され、

疎外、抑圧下にある被支配大衆が、自らを主体的に権力化させ、その様な大衆権力の組織化によって、国家権力の撤廃を内在的に志向しつつ、国家権力の撤廃と政治権力の獲得を目指し、最終的に国家の撤廃と政治過程の消滅へと現実化されていく内実を孕んだ大衆の自立的キビしい内戦を云うのである。更に云えば、自然発生的に生み出された資本主義の撤廃と止揚がそれ自体に成されなければならないのだ。そして同時に政治過程も主権には、大衆権力によって最終的に撤廃させられるのだ。我々が「大衆の自己権力の利徹化」をキビしい根拠におく場合、この立場を明確に整備しなければならない。

「ヴェトナム反戦」「日帝打倒」として徹底的にキビしかった「10・8」以降の政治闘争の意味こそ、米帝とその代行者軍事体制に対して国際共産主義運動の連帯的キビしいとしてキビしかったその矛盾は我々に対する止揚止揚たとは云えない。これとは少なくとも、60年代民族解放闘争の勃発から、「民族」自決を抽出一面化し、「〈抑圧民族〉―〈被抑圧民族〉」と云う図式を、現下の帝国主義と新植民地支配の中の打倒を全く捨象して、現情況に対してドグマ的、倫理主義的な「あてはめ」、ここに唯一闘争の根拠を置